

# 近世の俗文芸と「お竹大日」伝承

——文化文政期を中心に

神 林 尚 子

「お竹大日（お竹大日如来）」伝承は、江戸大伝馬町の富家に仕えた下女お竹が、実は大日如来の化身であったとするものである。稿者は曩に、この伝承の起源を辿り、出羽三山信仰と関わった羽黒修験の活動と、芝・心光院の靈宝にまつわる地誌・名所記がその起源にあることを述べた。本稿では、これを踏まえて、「お竹大日」が文芸作品に取り上げられ、題材として定着していく過程を辿ってみたい。

「お竹大日」の実説は明確ではないが、早い例では延宝期（一六八〇頃）の写本『玉滴隠見』に、版本としては寛延二年（一七四九）刊の『新著聞集』に比較的詳しい記事がある。右の二書には小異もあるが、共通するところを摘記

すれば次のようになる。江戸大伝馬町の佐久間家に仕えた下女のお竹は、平素非常に慈悲深く、自分の食事は貧民に施して、自らは流しの網にかかった残飯を常食としていたが、死後大日如来としての正体を現したというのである。『玉滴隠見』には死後湯殿山に金色を放って現れたといい、『新著聞集』でも湯殿山での示現を語っている。

俗文芸での作例としては、安永期から川柳に取り上げられるほか、『甲子夜話』『兔園小説』等にも記事が見出される。文政期までには考証の対照となっていたことが知られる。川柳や考証随筆、読本など、ジャンルを越えて脚色されていく中で、「お竹大日」伝承はどのように展開していくのだろうか。以下、文化文政期を中心に、俗文芸における「お

竹大日」伝承の拡大を見ていきたい。

## 一 安永期の川柳にみる「お竹大日」 —— 文芸化の端緒

近世の俗文芸のうち、最も早く「お竹大日」が登場するのは、安永期の川柳であった。向井信夫氏の論考に指摘される通り<sup>4</sup>、安永期を境にお竹が川柳に扱われ始めることは、安永六年（一七七七）に愛宕山円福寺で行われた「お竹大日」の開帳と略縁起の影響が大きかったものと考えられる。「お竹大日」という題材の知名度を決定的にしたのが、安永六年の開帳であったと言いうこともできよう。

お竹どのどうだと凡夫尻をぶち（柳多留一五・26）<sup>5</sup>  
安永六年の『柳多留』にみえる右の作例が、記念すべき川柳での第一作である。下女のお竹が実は仏の化身であったという意外性が、「凡夫」の語によって表現されている。お竹を扱う川柳は、以後安永・天明期に数例を数え、寛政期以降その数を増していく。その数例を左に掲げる。

仏にめしを炊かせたは佐久間なり（一七・41）

朋輩のお松は飯をいつそ捨て（一八・34）

凡ならぬ女と佐久間思つて（一九・4）

仏とも知らず一両二分で置き（二八・17）

川柳における下女の定型として、お竹はしばしば好色の視線に晒されつつ、その実は仏の化身であったという意外性が強調される。また、穀物を尊んだという逸話が重視されると共に、雇い主たる佐久間氏に言及するものが多いことにも注意しておきたい。

江戸文芸における「お竹大日」への言及は、以後も江戸出開帳の度にその数を増していく。安永六年に続き、文化十二年（一八一五）、嘉永二年（一九四九）と、開帳の度に「お竹大日」が人の口の端にのぼり、新たな伝承が加えられていく動静が見て取れる。一方で、文化文政期の考証随筆や読本での脚色は、この題材に新たな相貌を与えることとなった。以下、文化文政期の諸作品に登場する「お竹大日」の諸相を見ていきたい。

## 二 文化文政期の「お竹大日」

### —— 題材の定着と考証

(一) 文化十二年の開帳と「お竹大日」

先述の通り、文化文政期の「お竹大日」に対する言及は、文化十二年（一八一五）にその数を大きく増しており、同年に行われた開帳に触発されていることが窺える。まず、小山田与清がこの開帳に足を運んでいることが、『擁書楼

日記』の文化十二年七月条に記される<sup>7)</sup>。

十七日、晴、浅草寺の観音にまうでぬ、念仏堂にて於竹大日如来の開帳あり、この神は出羽国羽黒山の麓にしづまりまして、文禄年中、江戸大伝馬町一丁目佐久間勘解由といへる名主が家につかへしはした女也とぞ、佐久間うぢを改て今は馬込とよぶ、そのゆゑよしは、縁起または新著聞集十三の卷往生篇に見えたり、

「お竹大日」に関する資料として、ここでは開帳に際して板行された略縁起に加えて、『新著聞集』の記事が挙げられている。なお、お竹の主人である佐久間氏は元禄十二年（一六九九）に退転し、姻戚の馬込氏が名主および伝馬役としての職分を引き継いでいる<sup>8)</sup>。『擁書楼日記』には「佐久間うぢを改て今は馬込とよぶ」とあり、厳密には正確な認識とは言えないにせよ、お竹の旧主が現在の馬込氏にあることが、ある程度周知されていたことが知られる。

ところで、伝承の流布は、一方で異伝の生成をもたらすこととなる。次に、大田南畝の『一話一言』における記述をみよう<sup>9)</sup>。

浅草堂前地の妙音寺裏通りに善徳寺と云ふ寺あり。此寺に佐久間氏の墓あり。

性岸妙智信女 延宝八（庚申）天五月十九日

右は如意輪観音の石塔に多りつけてあり、是れ佐久間お竹の石塔なるべしと言、今年（乙亥）（引用者注…文化十二年）浅草観音奥山念仏堂にて、お竹大日如来の開帳あり。

南畝はここでお竹の墓所について述べているが、ここには従来の「お竹大日」伝承にはなかった要素が複数認められる。まず、江戸の地誌や名所記では、佐久間氏（馬込氏）の菩提寺である芝・心光院にお竹ゆかりの遺物が伝わる旨が記されるが<sup>10)</sup>、ここでは浅草の善徳寺が佐久間氏およびお竹の墓所とされている。善徳寺の所伝によれば、佐久間氏（馬込氏）の菩提寺は当初増上寺であったが、後に増上寺の別院となった善徳寺に移ったという（なお、心光院もやはり当初増上寺境内にあり、別院を称していたが、宝暦十一年（一七六一）芝新堀端に移転）。善徳寺の所在地は、数度の火災によって日本橋馬喰町から浅草松葉町に移転、現在は赤羽の地に移っている。

また、南畝の記事では、お竹の石塔に刻まれた年記を

「延宝八年五月十九日」とするが、この年記の根拠も不明。「玉滴隠見」所収記事の下限が延宝八年（一六八〇）であることと関わる可能性もあるが、同書のお竹の記事は寛文年間の記事のうちに配されており、やはりこの点を根拠とは断じ難い。なお、この年記について、牛島史彦氏は、桂昌院の事績と関わりとの推論を提出されている<sup>11</sup>。心光院の寺伝では、桂昌院は増上寺参詣の折に竹女の話聞いていたと感動し、その遺品である「流し板」を納めるべく葵紋の綾布と塗箱を寄進したとするが、その桂昌院が、館林への一時退隠後、綱吉の將軍就任にあわせて江戸城に入城したのが延宝八年であった<sup>12</sup>。

もう一つ、南畝の記事で最も注目されるのは、お竹の事績が如意輪観音の石塔に彫りつけてあるとする一事である。大日如来の化身であるお竹にして、如意輪観音と同一視されるというのは、訛伝とはいえ注目に値しよう。ここにはおそらく、女人救済信仰が関わっているものと考えられる。如意輪観音は女人救済の菩薩としても信仰を集め、十界図では血の池地獄に堕ちた女人を救うという図様が多く見られるが<sup>13</sup>、「お竹大日」の信仰が女人救済と結びついてゆくとするのは、この伝承の拡大を考える上で非常に興味深い点である。

(二) 『甲子夜話』にみる「お竹大日」——松浦静山による考証

やや下って文政七年（一八二四）、『甲子夜話』にも「お竹大日」に関する記述がみえる。

…大日如来と称して芝赤羽の心光院と云へるに於竹と云へる婢女の遺像あり。事長けれどもその縁起のあるを爰に挙ぐ。昔耆人の僧あり。羽州湯殿山に七日籠り、大日如来の尊容を拝せんと懇念しければ、夢に金塔あらはれ、中に本尊ましまさず。…

（正編卷五十九）<sup>14</sup>

以下、「お竹大日」伝の概要が述べられるが、実はこの記述は、三縁山増上寺の縁起を伝える『三縁山志』（文政二年刊）の「お竹がながし」記事をほぼそのまま引用している<sup>15</sup>。文中の「縁起」とは、即ちこの『三縁山志』（別書名「縁山砂子」）を指すものであろう。右の伝承は、羽黒修験による略縁起、あるいは『新著聞集』記事のいづれとも系統の異なるものであり、心光院由来の伝承が「お竹大日」に関わる言説の一面を占めていたことが窺える。なお、『甲子夜話』が増上寺に関わる所伝を引くのは、肥前松浦侯で

あつた立場とも関わるものであろうか。

ただし『甲子夜話』には、『三縁山志』記事の一部改変も見受けられる。お竹遺愛の水板に関して、『三縁山志』にかば……と、参詣の人々が水板を「切取」ったことが記されるが、『甲子夜話』ではその条を省き、「然るに其水板より時々光を放ちければ、佐久間、須藤両氏より当院に納め」とするに留める<sup>16</sup>。水板の切取りが実際に行われたか否かの穿鑿は措くとして、静山がこの条を削った理由としては、増上寺への敬意を読み取るべきか、あるいは心光院の宣伝と取れる描写を避けたものか。もちろん、参看した底本自体の記述が違っていた可能性もあり、『三縁山志』の諸本異同を改めて検証する要もあるが、論点の一つとして提示しておきたい。

なお、右の『甲子夜話』の引用は、「大日は木綿普賢は緋縮緬」という川柳を解釈する記事の一部にあたる。松浦静山は、『三縁山志』および『十訓抄』の記事を挙げながら、当該の句が「お竹大日」と神崎の遊女を詠じたものと解するが、結果的にこの記事は、これら二人の女性が伝説化されていった過程についての考証となっている。安永期の開帳を境に、川柳に扱われ始めた「お竹大日」は、まさにそ

の川柳の一例を介して、松浦侯による考証の対象となるに至ったのである。

### (三) 「お竹大日」と考証——『兔園小説』を中心に

近世期の「お竹大日」に関する文献的考証としては、山崎美成の著述も見ておかねばならない。山崎美成は『海録』（文政六年成）および『兔園小説』（文政八年成）の二度にわたって「お竹大日」について考証を行っており、この伝承にかなりの関心を抱いていたことが想像される。

まず『海録』巻一の記述をみよう<sup>17</sup>。ここでは『玉滴隠見』および『新著聞集』を引きながらお竹の伝を記すが、あわせて「去る年もこの大日仏を、浅草観音境内にて開帳なりし也」との言に続けて、先掲の「一話一言」と全く同文の記述が続く。『一話一言』の書名を挙げていない以上、直接の引用と断ずるのは若干の躊躇があるが、南畝の記述が「お竹大日」の伝承の中である程度知られていたことが想像される。

美成の考証は、続く『兔園小説』に至ってより拡充されていく。この伝承に対する彼の基本的な態度は、『兔園小説』中の次のような言に尽くされている。

○於竹大日如来縁起の弁 好問堂稿

安永六年丁酉七月、江戸にて於竹大日如来の開帳あり。：(中略、安永版縁起を引用)：世にありとある神社仏利の縁起といふものに、妄誕ならざるはいと稀なり。此に載する縁起を、かゝるを実にありと思ひて疑はざるものあらんは、愚に近しとこそいはれ。されどあなたがちに無しとせんも、又誣ゆるに似たり。：今この縁起を左に弁ぜん。：18

開帳略縁起の文言をそのままに受け止めるのは愚としながらも、このような伝承が行われたこと自体に意味を認め、そこに託されたものを読み解こうとする姿勢は、すぐれて近代的なとも言えるのではないか。以下、山崎美成は『玉滴隠見』および『新著聞集』の記事に基づいて、略縁起の記述を検証していく。彼の姿勢は一貫して文献学的であり、右の二書を除いては「みな妄誕なること論をまたず」と断じているが、墓碑に関してはその基準がやや異なるようである。お竹の実伝の時期について、安永六年版の略縁起には「文禄年中」とあるが、美成は善徳寺に伝わる墓碑の銘を引用した上で、次のような論を展開する。

：玉滴隠見、何れの年誰の撰と云ふこと詳ならねど、その書を読むに、寛文ごろの事いと多く見えなれば、そのころのものとしらる。扱墓碑の延宝とあるに合へり。されどその月日の違へるを思ふに、墓碑の正しきは論ずべくもあらず。書に記したるは、遠く出羽の人の伝聞なれば、もとより聊の違ひはあるべきことなり。されば元禄ともしもいはんはさることなれども、文禄とするはいと謬なり。再びおもふに、かゝることいと近き世のことは憚りなきにあらず。その比、忌むところありて、しか記したるものしるべからざれば、強ひて咎むべきにあらずかし。「此墓碑の事、温故名跡志、浅草志等には漏らしたりき。」

これに続けて美成は、お竹の生身の身顕しの条に関して、『古事談』にいう性空上人と神崎の遊女の説話を附会したものと推論している。またお竹が姿を消したという縁起の文言に対して、「仏家にはかゝる奇瑞をいふこと常なり。愚俗はあざむくべし。敢て識者を誣ゆべけんや。已にしるしたるがごとく、今墓碑現に存せり。」と述べる。文献に対して客観的態度を貫く美成にして、墓碑に対する信頼度の違いは、今日からするとかえって興味深く思われる。

なお、やや遅れて成立した『道聴塗説』（文政八〜十三年成）にも、ほぼ同様の記述がみえる<sup>19</sup>。同書では、善徳寺への墓参の折、お竹の墓を実見したことから書き起こし、『玉滴隠見』の記事を引用した上で、次のように述べている。

…墓碑と件の書（引用者注・『玉滴隠見』）と月日相違あれども延宝年中に死して、靈験ありしは疑なし、隠見は伝写の誤もあるべければ、墓碑の月日を正とすべし。安永六四年開帳の時、出羽国羽黒山の麓別当玄良坊が書きたりしお竹大日如来縁起に詳なり。但文禄年中佐久間勘解由とかけけるは、誤とすべし。<sup>20</sup>

『兔園小説』への直接的な言及はないが、美成の所説とここまで一致することは、偶然とみて良いものであるうか。美成の考証が後世に与えた影響については、今後諸書の記述を比較しながら更に検証してみたい。

最後に、「お竹大日」をめぐる考証の輪について、再び『兔園小説』の記述を見ておこう。美成による「お竹大日」記事の最後には、次のような文言がみえる。

…過し比、小梅村の南無仏庵をとぶらひける道のほど

にて、このお竹がことをかたり出でたるに、来れる月の兔園会にもせよとありけるを、思ひ出で、そのよしを記して、小説の料に充つと云ふ。<sup>21</sup>

お竹に対する関心は、美成のみならず、仏庵をはじめとする「兔園会」同人の間に共有されたものであったと思しい。『兔園小説』の成立を考えれば当然の結論ではあるが、改めてこの一事を考えておくことは、「お竹大日」伝承の展開を考える上で少なからざる意味を持つように思われる。開帳を通じて知名度を増していった「お竹大日」伝承は、文政期に至って、当代を代表する読書子、考証家たちの関心の対象ともなっていたのである。

#### （四）啓蒙的読本『田家茶話』——異伝の生成

「お竹大日」の知名度の拡大は、文献学的考証の対象となる一方で、読本や草双紙などの文芸作品に脚色される方向へも向かうこととなった。ここでは、啓蒙的読本『田家茶話』の例を考えてみたい。

大蔵永常著『田家茶話』は、文政十二年の刊行である<sup>22</sup>。のち『奇説著聞集』と改題された後印本も行われた（天保十二年、丁字屋平兵衛ほか板）。本作は、田舎の老翁二人の

問答という形式をとり、それぞれが見聞きした「奇説」を語り合うという形で、多数の話柄を取り上げている。教訓性を基調としつつ、靈驗譚や巷説など、短いながらも特色のある話が多く収められており、近世後期の「教訓」や「奇談」のあり方を考える上でも興味深い作品である。

この『田家茶話』にも「お竹大日」が登場しているが、その所伝は他の資料とは些か相違している。穀物を尊んで施しをしたこと、流しの残飯の条などはそのまま伝えるものの、お竹の出自やその正体の身願しの経緯などには本作独自のものがある。

### ○お竹大日の話

江戸大伝馬町の馬込某の下女、其名を竹と呼べり。此女流しへ割注・上方にてハシリと云ふの向ふの水落に袋をくくり付置、余人のこぼしたる飯粒の流れ落ちるを取てこもくの交れるを撰除け食し、余の食事をする事なし。万事事に准じ、つぎまやかに致しければ、主人も斯る女は又あらじ杯、人にも語りて称美してゐける。

此主人或時夫婦連にて入湯に行て、座敷の一間を借りけるに、隣座敷にて下女竹が身の上に能似たる話

をすれ共、その親元の名所違へり。然れども竹が身の上には違ひなきと思ふうち夢は覚けり。其事を女房に語れば、女房のみし夢も聊違ひなければ、不思議に思ひ、帰て竹を呼……(中略)……実の在所はいかなるやと問ければ、決して加奈川に違なしと答へ、二階へ上るやいなや紫雲たなびき、お竹はその雲に乗じて天上せり。扱は凡人ならざりしと皆奇異の思ひをなし、夢中に聞し在所へ人を遣し尋ければ、其所に大日如来の古堂あり。さては其如来の化身なるべしと、夫婦も随喜の思ひをなし、如来を渴仰しける。夫より此大日堂に参詣の者多くお竹大日と唱しならはせり。…23

以下、本作独自の叙述を順に見ていこう。まずお竹の正体の身願しについて、羽黒山(ないし湯殿山)修験の関与が語られない点が最大の特徴である。また、お竹の主人は「馬込某」とあり、「佐久間」姓は挙げていない。この「馬込某」夫婦が湯治に出かけた際、夢のうちに隣座敷にてお竹と似た境涯の人物の身の上話を聞いたことが正体の身願しにつながるが、この展開も本書以外には見られないものである。更に、お竹の在所として「加奈川」を挙げてい



点も注意されよう。後の展開から、この在所は偽りであったことが知られるが、お竹と「加奈川」を結びつけた例は他の「お竹大日」資料には見られず、「大日如來の古堂」の伝承とあわせて、更に調査が必要である。

お竹が姿を消すにあたり、「紫雲」に乗じて「天上」したとされる点にも留意したい。『玉滴隠見』など早期の資料ではお竹の死が語られていたのに対して、安永版略縁起や『三縁山志』など心光院関連の資料では、正体の見直し後、人知れず姿を消すこととされていた。本作に至っては、神仏の象徴たる紫雲に乗って天上したことが「皆」の共通認識として記されるのである。この場面は、「下女雲にのりてこくうにさる図」として、挿絵にも取り上げられている(十五才)。紫雲に乗ずるお竹の視覚的なイメージも含めて、ここには先行する草双紙『お竹大日如來／稚絵解』(文化十二年刊)の影響も考えるべきであろうか<sup>24</sup>。

ところで、『田家茶話』では先の引用に続けて、江戸出開帳と「お竹大日」信仰にも言及する。

其後年経て、此大日如來の開帳、江戸にて度々有し也。其時毎に、伝馬町某方に御小休あり。其宝物に、お竹が手にふれし釜有。思ふに世上の人の飯粒を

捨ることをなげき思召て、大日如來此土に化現まし  
く、御示し有し事明か也。実に五穀は命の親なれば大切にすべき事也。世俗に穀をばさつといふも  
理りなり。<sup>25</sup>

ここでは、まず「伝馬町某方に御小休あり」という記述に興味がひかれる。姓名は明記されないものの、これが伝馬町名主の馬込氏を指すことは確実であろう。先述のように、佐久間氏から伝馬町の名主役と伝馬役を引き継いだ馬込氏は、「お竹大日」の祭祀をも継承したと推定されるが、この記述もそれを裏づけるものと言うことができる。

もう一つ、本作の叙述の特徴として、お竹が五穀を尊んだことを強調している点も注意される。実はこの「お竹大日の話」の直前には、「穀を大切にしたる下女の話」が載せられていた。

性命を保ち養ふは五穀なり…豊後の国日田に皿屋と云る家の下女、穀類を大切に致し、一粒たり共洗ひ流し捨る事なし。此女夜の燈火なけれども針に糸を通し縫物をも致せり。是は穀を大切に致すを仏神感応ましく、てなるべしと其所の人云あへりと承る…<sup>26</sup>

ここでは、穀物を大切にしておかげで仏神の感応を得、超人的な視力を得た下女の話が語られるのである。挿絵としても「穀を大切にしたる徳にて闇にぬひものをする図」(十三ウ)が挙げられており、その靈験が視覚的にも印象づけられる。右の引用に続けて、眼病は多く五穀を麓末にした罰であることが述べられるが、こうした文脈に置き直す時、「お竹大日」の伝承も、他書とはまた変わった意味を帯びてこよう。

「お竹大日」の定型として、穀物を尊んだこと、流しに網を括り付けて残飯を無駄にしなかつたことが語られることは既に述べた。ただし、他の資料では、その美質が下女としての心根の正しさ、慈悲深さを示す逸話として扱われていたのに対し、本書では文字通り「穀を大切に」すること自体の徳に力点が置かれているのである。「お竹大日の話」の末尾に、「五穀は命の親なれば大切にすべき事也」と再説されていることも、その端的な現れであろう。啓蒙的な「奇説」を集めた読本『田家茶話』において、「お竹大日」の伝承は、穀物を尊ぶというきわめて日常のかつ実践的な道徳の例証として位置づけられているのである。

なお、嘉永四年の江戸開帳に際して、「お竹大日」を描いた錦絵が多数出版されるが、その填詞には、『田家茶話』所

載の記事を引いたものが相当数認められる<sup>27</sup>。この一事も、『田家茶話』がある程度広く読まれていたことを示すとともに、「お竹大日」伝承の総体に対する本作の影響力を証するものとも言えよう。

付言すれば、為永春水編『増補外題鑑』(天保九年刊)において、『田家茶話』は「時代物の部」に挙げられ、雨中の徒然を慰める「お伽の草紙」と位置づけられている<sup>28</sup>。

そもくこのしよ此書は忠臣孝子義婦節婦の身の上を初として古今の奇談を数百カ條あつめたり…さればとて戯作ものがたりにあらざればき氣をなぐさむる其中に教訓となる事いと多しおほ殊に近年の実説 人々の見聞せられし事までくわしく正してしるしたれば いろれの席にてはなし玉ふ共はづかしからず 聴衆によるこぼれ信ぜられて 茶のみばなしの上坐となるべしあるひは軍談の先生落し咄しをせらるゝ方々はよませ玉ふてその益多く 貴賤をゑらまず一同に好まるゝまことに奇代の実録といふべし<sup>29</sup>

ここで、本書を「戯作ものがたり」すなわち創作ではなく、「近年の実説」を集めたものとしている点に注意した

い。「お竹大日」を含めて、『田家茶話』の記事は「実録」とみなされていたのであり、だからこそ「気をなぐさむる」と共に「教訓」の効用も備えているというのである。実説は明確でないにもかかわらず、「お竹大日」があくまで実話として捉えられており、だからこそ教訓性・啓蒙性を備えた話材として位置づけられていたことが、本書の記述から改めて確認される。

もう一つ、舌耕文芸の徒に一読を勧めている点にも注目しておきたい。為永春水は、自身講談師の経歴を持つことでも知られており<sup>30</sup>、実体験に即した推奨の言として傾聴すべきものであろう。日常的な話材を分かりやすく、かつ興味を持たせるように説く本作の筆致が、舌耕文芸にも通じるものであったとするならば、翻って当時の啓蒙的読本の、そして講釈の目指すところをも窺い知ることができよう。「お竹大日」はそうした文脈においてもまた新たな光を当てられはじめているのである。

### 三 類話と異伝 —— 変奏される「お竹大日」

(一)「お竹大日」伝承の指標 —— 柳田国男説の検討  
前節にて、『田家茶話』の作中で、五穀を尊んだ美徳が「お竹大日」伝承の主軸に据え直されたことを指摘した。こ

れを踏まえて、民俗学的観点からの先行研究を検討するとともに、この伝承への懐疑を窺わせる作品を掲げて、本稿の小括としたい。

穀物を尊んだことがこの伝承の根幹にあるという捉え方は、柳田国男の所説とも共通している。柳田国男は、新潮社版『日本文学大辞典』の項目解説の中で、この説話の起源として東北の民譚を挙げている<sup>31</sup>。「実は古来の民間説話の、一つの流伝様式に過ぎなかつた」とし、「話だけは可なり古い頃の東北産であつた」とするのがその立場である<sup>32</sup>。ただし本稿は、柳田説にそのまま賛同するものではない。下女に関わる説話として、五穀を尊び、その費えを戒めたという伝承は、それ自体必ずしも特異なものではないだろう。説話の特質とその系統を考える上で、類話を探ることには一定の意味があるが、それを踏まえて、当該の説話が類話に対して特徴的に備えている指標を考えることこそが、より重要ではなからうか。少なくとも「お竹大日」という説話として考える場合、他の類話に対してこれを独自のものたらしめている要素を明らかにする必要がある。こうした見地から、改めて柳田の挙げる「古来の民間説話」を検討してみたい。柳田はまず、仙台領の旧事を記した『囊塵埃捨録』巻一にみえる忠婢の話を挙げる<sup>33</sup>。

…里老の説に昔此所（引用者注…桃生郡小野本郷）の村長一人婢女を召仕ふ。此女甚慈愛の心深く。為<sup>レ</sup>「飢人」には与<sup>レ</sup>飯。肌薄人には遣<sup>二</sup>衣装<sup>一</sup>「扨して。其身は餓飯匱袍なり。年来主人に尽<sup>二</sup>忠勤<sup>一</sup>」。之を天神地祇も感応ありけるにや。此女或時病に臥て。既に命終りなんとせし時。從<sup>二</sup>全身<sup>一</sup>「光明赫奕」として飛行す。村長奇異の思をなして。此婢女が行衛を尋けるとなん。彼家より十三町程当<sup>二</sup>戌亥<sup>一</sup>。樹木茂たる有<sup>レ</sup>森。其所に到て見るに。彼の婦が常に所持せし木櫛落てあり。然れ共婢女が容は見へず。其夜夢想の告ありて神に祭と云り。村長が子孫今に栄へて祭祀の時は。彼家に神輿を移し。木臼を置て一夜止る。これは主從の以<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>縁斯るとなん。…

右の記事は、確かに「お竹大日」と重なるところが多い。旧主の縁を強調し、村長の家の祭祀の起源を示す説話としての性格も類似しており、こうした類話の流れにおくことで、お竹と佐久間氏（馬込氏）の結びつけられ方を改めて考えることもできるだろう。ただし右の話では、「慈愛の心」や「餓飯匱袍」と施与の逸話は語られるものの、流しの袋と残飯についての具体的な描写はみられない。また桃

生郡の伝承では、死後の昇天に続けて、その遺物として「木櫛」が登場しており、これが後に祭祀の対象となるなど、象徴的な役割を果たしている。この点、湯殿山への転生ないし「佐久間大日」の尊像をもってその奇瑞の証とする「お竹大日」とは、やはり行き方を異にしているとみるべきであろう。

続けて柳田が挙げるのは、青森県八戸の昔話として、『奥南新報』昭和六年七月一九日号に載せられた記事である<sup>34</sup>。曰く、「或る家の飯炊女」が、流しに袋を下げて飯粒を拾い集め、鳥類に施した徳にて、弘法大師から法衣の袖の布を賜った。これで顔をこすると美女に変じたが、主の貪欲な女房が借りてこすったところ、「馬のやうな顔」になったというのである。「流しの口の袋」は確かに「お竹大日」と共通するが、右の説話には、むしろ各地に伝わる弘法大師の靈異説話との関連を見るべきかと思われる。

このほか、柳田稿では美濃橋木長者の娘が飯粒を集めて池の魚に与え、後に幸運長寿を得た話や、山城蟹満寺に伝わる、蟹に食物を施して後に大蛇の難を逃れた娘の話を手始め、「飯粒」に備わる「何か呪術的の意義」を想定するが、「飯粒」に関わる話を全て類話とみなすというのは、あまりに雑駁に過ぎるのではないか。飯粒に関わる勤儉が具体的

にどう行われ、それがいかに報われるか、主人公の境涯（婢女であるか否か）も含めて考慮することで、はじめて建設的な議論たりえよう。

ここで、改めて「お竹大日」伝承の特色を考えたい。右のような類話群から逆に浮き彫りになる指標は、（一）慈悲節儉の下女として、流しの口に袋を付けて残飯を集めたこと、（二）出羽三山（羽黒山ないし湯殿山）修験の関与、（三）佐久間氏（馬込氏）による祭祀、という三点であろう。大日如来の仮現であるとするのは、（二）の出羽三山信仰との関わりから導き出されたものと考えられる。この基本的な枠組みに、資料の性格によって下女の頓死と蘇生、紫雲に乗じた昇天、生前の遺物（水盤や鍋、釜）の奇瑞といった要素が徐々に付与されて、次第にこの伝承が拡充されていったものと整理できよう。

（二）「お竹大日」と「騙り」——『儻偶用心記』にみる  
懐疑と笑い

最後に、特に羽黒修験との関わりから、「お竹大日」として示唆的な要素を含む作品を挙げておきたい。宝永六年（一七〇九）に刊行された浮世草子『儻偶用心記』がそれである<sup>35</sup>。本作については、既に向井氏のほか藤井徳太

郎・延廣眞治氏らによる指摘が備わるが<sup>36</sup>、これら先学の指摘に拠りながら、本書の述べるところを見ていこう。

本作は、諸國の騙りの話を集めた説話集であるが、その一篇に、「お竹大日」にきわめてよく似た話が見出せるのである。目録には「疝氣の虫をいただいた五拾両 江戸にかくれなき菩薩の食焼、酒屋の地獄は湯殿山に別火の山伏」とあり、その内容がある程度窺われよう。

むかし須田町の酒屋の内に、すぎといへる下女有。此者つねのほうこう人とちがひ、かくべつよくはたらし、朝夕ぞうづにおつるめしつぶをひろひ、あだにする事なし。ぬか小米までも、もつたいなきとて、ちりあくたの中よりも多りいだし、いたゞひてよく洗ひ、我もくい、又はこつじきを見かけてはほどこしけり。…あるときはぐる山の山伏ふたりづれにて此酒やへあんないし、すぎ様といへる人にあいたきよし、…ゆどのさんにて、正身の大日によらひをおがみ申たきとて、諸願のうへ、一七日があいだ、だんじきしてぜつちやうにこもりし時、あらたなる御こゑあつて、…まこと我すがたをおがみたくおもはば、むさしの国須田町二町目、かどより二けんめ、酒屋の内のしもおんな

すぎをおがめとの御をしへ、ありがたく…とる物も取  
あへずいそぎ爰にのぼり…<sup>37</sup>

場所は須田町、下女の名も「杉」との違いはあるが、こ  
こまでの展開は「お竹大日」とほぼそのまま一致してい  
る<sup>38</sup>。流しの口の袋こそ描写されないものの、「ぞうづ」の  
飯粒を拾い集めて食べ、あるいは乞食に施しているという  
挿話は、「お竹大日」の定型を踏んだものとみて良いだろ  
う。羽黒山の修験の登場、湯殿山参籠での夢告を言い立て  
て、大日如来の化身たる下女に面会を申し入れる点も共通  
している。

ただし、本話の眼目はこの先にある。この後二人の山伏  
は、酒屋は米を麓末にする商売のため地獄に落ちると脅し  
つけ、それを逃れるための供養を名目に、五十両の小判を  
受け取って去る。ただし山伏が去った後、主人はお杉を呼  
び出して暇を告げる。実は先ほどの山伏は、お杉の兄と夫  
であり、目配せの様子からそれを見破っていた主人は、小  
判と偽って古い温石を与えていたのである。即ち本話で  
は、お杉も山伏も詐欺師であり、湯殿山の夢告と大日如来  
の奇瑞も小判を騙り取るための方便であった。巧妙な騙り  
の手口と、それを見抜いた主人の機転がこの話の骨子と

なっているのである。

本話がおそらくは「お竹大日」を下敷きにし、そこに皮  
肉な笑いを加えて成っていることは確実であろう。本作の  
刊行は、佐久間氏の退転（元禄十二年）からちようど十年  
後にあたるが、この時期には上方まで「お竹大日」の伝承  
が伝わっていたものと思しい。しかも本話では、その信仰  
を称揚するどころか、偽の羽黒修験による詐欺の話柄とし  
ているのである。江戸と上方という地域的な相違もあるに  
せよ、ここには「お竹大日」という話自体に対する同時代  
人の皮肉な眼差しを確かに見出すことができよう。羽黒山  
の修験者の胡散臭さ、度を超した節儉に努める下女への懐  
疑、といった視線は、少なくともある程度の割合で、同時  
代にも存在していたのではないか。それを端的に表現した  
のが右の騙りの話であり、「お竹大日」信仰は、一方ではこ  
うした視線を受け止めながら浸透していったのである。

「事実」と「虚構」に対する相対的な視点としたたかな笑  
いの精神も、この伝承の背後にあってその流布を支えたも  
のとみるべきであろう。「お竹大日」信仰と、それを見つめ  
る同時代人の眼差しは、到底一枚岩とは言い難いものであ  
り、だからこそ、異伝の生成を含め、これほどの広がり  
を持ち得たものと考ええる。

【注】

- 1 この題材の称は、「お竹大日如来」「お竹大日」など複数あるが、本稿では以下「お竹大日」に統一する。この伝承に関する主な先行研究としては、延廣眞治「講談速記本ノート三十 お竹如来」（『民俗芸能』二一七号、一九八四年五月）、宮田登「お竹大日如来——江戸の都市伝説」（『江戸文学』第四号、一九九〇年一月）、向井信夫「古書雜録 二 お竹大日」（『江戸文芸叢話』ぺりかん社、一九九五年）、小松和彦「お竹——羽黒山お竹大日堂」（『神になった人びと』淡交社、二〇〇一年）等がある。このほか、個別の観点からの先行研究については、本稿中の該当箇所でも適宜挙げる。
- 2 「お竹大日」伝承の生成——開帳と出羽三山信仰、名所記を通じて」（『鶴見大学文学部紀要（日本語・日本文学編）』五四号、平成三〇年三月）。
- 3 『玉滴隠見』については「内閣文庫所蔵史籍叢刊」第四四卷（汲古書院、一九八五年）所載の影印、『新著聞集』は『日本随筆大成』第二期第五卷（吉川弘文館、一九七四年）を参照した。
- 4 注1前掲論考、二六〇頁。
- 5 「お竹大日」ものの川柳については、『川柳江戸砂子』（今井卯木著、岡田甫増訂、春陽堂、一九七六年）を参照。
- 6 文化十二年の開帳は浅草・奥山念仏堂、嘉永二年には本所・回向院で行われている。比留間尚『江戸の開帳』（吉川弘文館、一九八〇年）を参照。
- 7 『近世文芸叢書 第十二 擁書楼日記』（国書刊行会、一九一二—二一五年）。
- 8 佐久間氏および馬込氏については、注2の拙稿のほか、高山慶子『大伝馬町名主の馬込勘解由』（東京都江戸東京博物館調査報告書第二一集、二〇〇九年）、同「江戸町名主の社会的地位——大伝馬町名主馬込家を事例として」（志村洋・吉田伸之編『近世の地域と中間権力』山川出版社、二〇一二年）を参照。
- 9 「一話一言」補遺巻四。引用は『日本随筆大成』別巻六（吉川弘文館、一九七九年、四二五頁）による。
- 10 早い例では、享保十一年（一七三二）刊の『新撰江戸砂子』に、心光院（当時は増上寺内の塔頭）の項に「佐久間の下女が流シあり」とある。このほか、延享三年（一七四六）刊『江府名勝志』、明和九年（一七七二）刊『再校江戸砂子』等をはじめ、『江戸名所図会』巻之一（天保五年〔一八三四〕刊）に至るまで、地誌類では一貫して、心光院の項にお竹の遺事を載せる。江戸の地誌と「お竹大日」については、注2の拙稿でも言及。
- 11 『江戸の旅と流行伝』（板橋区立郷土資料館、一九九二年）所載論考（五七頁）。
- 12 なお、斎藤岩蔵「於竹大日の信仰」に、善徳寺の過去帳に関する記述がある（『むすび』昭和四〇年一月号。原本未見、引用は注11前掲『江戸の旅と流行伝』による）。斎藤氏が昭和三九年夏、当時の善徳寺住職に照会された結果、過去帳の「延宝八年庚申」項に「林光院性岸妙智信女五月十九日佐久間氏召仕於竹事」との記載があるが、ただし書体の相違から、延宝当時の書き入れとは見なしが

たいとの回答を得たという。むしろ南畝の伝えるような巷説に基づいて、善徳寺の過去帳に右のような記載が加えられた可能性も考えられる。

13 如意輪観音信仰については、高達奈緒美「血の池地獄の絵相をめぐる覚書―救済者としての如意輪観音の問題を中心に」（『絵解き研究』六号、一九八八年六月）等を参照。

14 引用は、東洋文庫版『甲子夜話』第四卷（平凡社、一九七八年）による（一九七頁）。

15 『三縁山志』巻四、一九丁裏〜二〇丁表。引用は西尾市岩瀬文庫蔵本による（古典籍総合目録データベース掲載画像にて閲覧）。引用に際して適宜句読点を施した。

16 前掲『甲子夜話』第四卷、一九七頁。この記述に続けて、「当院」（ここでは心光院）について「此時当院は縁山の内道場にして、感智国師の御代也」との注記も加えている。

17 文政六年成、写本。引用は活字翻刻『海録』（国書刊行会、一九一五年。「復刻版」ゆまに書房、一九九九年）による。

18 『鬼園小説』第三集。引用は『日本随筆大成』第二期第一卷（吉川弘文館、一九七三年）、六二〜六三頁による。

19 『道聴塗説』第八編、大郷信齋著。引用は『鼠璞十種』第二卷（国書刊行会、一九一六年）による。

20 注19前掲書、七一〜七二頁。

21 注18前掲書、六五頁。年記は「文政八年己酉春三月朔」。

22 五卷五冊、蹄齋北馬画。東京大学総合図書館所蔵の早印本のほ

か、同館所蔵の改題後印本『奇説著聞集』を参照した。

23 『田家茶話』巻二、十四オ〜十五ウ。引用は東京大学総合図書館蔵本による。引用に際しては、適宜句読点を加え、私に段落分けを施した。

24 歌川国芳画。国立国会図書館蔵本を参照。『日本小説年表』では十返舎一九作とするが、作中には作者名の記載はなく、一九作とする根拠は不明。『稚絵解』の詳細については別稿を用意したい。

25 同前、十五ウ〜十六オ。

26 同前、十三オ〜十三ウ。

27 注11前掲書のほか、『浮世絵師たちの神仏』（渋谷区松濤美術館、一九九九年）等を参照。

28 岡田琴秀編、為永春水増補。『和泉書院影印叢刊四九 増補外題鑑』（横山邦治編、和泉書院、一九八五年）に影印および解題が備わる。

29 引用は六十五丁裏〜六十六丁表（影印版では一一二〜一一三頁）。なお、引用にあたって適宜一字空白を設け、清濁を補った。

30 中村幸彦『舌耕文芸家春水』（初出『日本古典文学大系 月報』第六一号、一九六二年八月。『中村幸彦著述集』第十卷（中央公論社、一九八三年）所収）。

31 「お竹大日」（『日本文学大辞典（増補改訂）』別巻、新潮社、一九五二年）。のち『定本柳田国男集』第二六卷（筑摩書房、一九七〇年）所収。

32 引用は前掲『定本柳田国男集』第二六卷（三八四頁）による。



- 33 『襄塵埃捨録』は遠猪走道知著、文化八年成。五卷五冊。『仙台叢書』第七卷所収の翻刻を参照した（仙台叢書刊行会、一九二二―二七年刊。引用は複製版〔宝文堂出版、一九七一年〕二八八―二八九頁による）。
- 34 原資料は未見。現時点では柳田稿を通じての参看に留まる。
- 35 月尋堂著。改題本として『世間用心記』あり。本稿での引用は改題本（東京大学霞亭文庫蔵、霞亭文庫画像データベースにより閲覧）による。あわせて饗庭篁村校訂『袖珍名著文庫 世間用心記』（富山房、一九〇七年）も参照した。
- 36 藤田徳太郎「お竹大日如来」（『日本小説史論』至文堂、一九三九年）。延廣氏・向井氏の論考は注1に前掲。
- 37 卷四―四、十一オ―十二ウ。引用に際して、句読点を補訂した。
- 38 藤田氏は、下女の名を「お杉」とした理由について、主家を酒屋としたことからの連想かと推論される（注36前掲稿、二六頁）。

（鶴見大学文学部准教授）